

＜書評論文＞

マクルーハンの近代再考

Judith Stamps,
Unthinking Modernity:
Innis, McLuhan,
and the Frankfurt School
 (McGill-Queen's University
 Press, 1995)

宮武実知子

1 はじめに

ここ数年来、再びマーシャル・マクルーハンへの注目が高まりつつある。いわば第三次ブームである。マクルーハンは1950年代から60年代にかけて、世界的なブームとなった。特に日本では、テレビや広告に正当性を与えてくれる理論家としてメディアの現場で大歓迎された。そして、80年代のいわゆるバブルの時代に、今度は文化論的なブームとなったのである。とはいえ、いまなお、マクルーハンにはある種の胡散臭いイメージがつきまとう。技術決定論者といった一面的な評価しかされていない上に、その特殊な用語や記述スタイルのために、学会でまともに論じられることがほとんどなかったことによるだろう。しかしながら、現代のインターネット社会が、マクルーハンの「地球村」のイメージで語られるようになり、『現代思想』1992年3月号におけるマクルーハン特集

(「メディアとしての人間——マクルーハンを越えて——」)をはじめ、再度彼を見直そうという気運が高まってきている。同時に、従来とは異なるマクルーハン理解の必要性が指摘されているが、メディア論者としてのマクルーハン像以上の新しい捉え方はいまだ一般的でないのが現状であろう。

その意味で、ジュディス・スタンプスの『近代を再考する——イニス、マクルーハン、フランクフルト学派』は、新たなマクルーハン像を模索しつつある現在の我々にとって、興味深い一つの可能性を提示する。マクルーハんと、彼に多大な影響を与えたカナダ人研究者、ハロルド・イニスとは、これまで、メディア研究の分野で著名ではあるが重視はされずにいた。しかし実際のところ、彼らの思想的背景や、メディア論以外の文脈での解釈は、余り知られていない。著者スタンプスは彼らの知名度と評価の間のこのギャップを是正しようとする。本書の狙いは大きく分けて二つある。ひとつは、フランクフルト学派の二人、テオドール・アドルノ及びヴァルター・ベンヤミンとの比較を通じて、イニス・マクルーハンに対する偏った評価を打破することである。彼らは、メディア研究、カナダ研究を越えて、近代西洋社会の文明批判を行ったのだ、と著者は考えている。従来、この四人が並列して扱われることはなかったが、実は彼らは主題、方法論ともに、きわめてよく似た関心を共有している。さらに、本書の狙いのもう一つは、彼らが、フランクフルト学派の「否定弁証法」を、いわば独自の形で発展させたということを論証することである。「否定弁証法」とは、弁証法をプラトンに始まる伝来の肯定的な性質から解放しようとするものであるが、このとき重要になってくるのは、否定の否定を通じて総合に至るのではなく、矛

盾の段階に固執して、そこで生じている事態に目を向けることである。この矛盾、同一的なものに対する非同一的なものが、もちろん使われる用語は異なっているが、イニス、マクルーハン、アドルノ、ベンヤミンに共通した関心であった。

2 概要

以下では、本書の章立てに沿って内容を紹介することにしたい。本書の構成は、まず序文で両学派の比較の意図が説明され、第一章で四人の用語や概念の類似が指摘される。そして、第二章でフランクフルト学派の二人の思想が紹介された後、第三章と四章でマクルーハンのメディア論に大きな影響を与えたハロルド・イニスの思想が、第五章と六章でマクルーハンの思想が詳しく紹介される。その上で、第七章で四人の比較分析と否定弁証法の可能性が論証されている。

序文では、イニス・マクルーハンとアドルノ・ベンヤミンとを比較する理由が説明される。まず、彼らはともに、マージナルなものが人間の意識形成に及ぼした影響について考察している。また、ほぼ同時代を生きた彼らは、理性を根拠づけるものと、それが暴力へと結びついていく可能性を指摘していた。そして彼らは、四人とも西洋合理主義に対する不信感を持ち、口誦性の回復の必要性を論じていた。イニスとマクルーハンの近代西洋に対する批判的なまなざしゆえに、著者は彼らを弁証法的哲学者として捉え直そうとするが、従来彼らがそのように捉えられることがなかったことを考えれば、ユニークな試みであるといえよう。アドルノ・ベンヤミンというよく知られた思想家と比較することによって、イニス・マクルーハンの思想の現代的価値を強

調することを著者は意図している。

そこで、第一章「空間、音、否定弁証法 (Space, Sound, and Negative Dialectics)」では、四人を比較する前提として、彼らの用語や概念の類似と差異が検討される。特に注目すべきことは、彼らがともに、近代の病理的現象の一つとして、口誦性の喪失を捉えていたことである。例えば、アドルノ・ベンヤミンは、近代西洋の、聞くことより見ることを優越させる心的傾向を指摘して、西洋文化を「空間的バイアス」を持つ文化と論じている。一方、マクルーハン、文字文化が生み出す世界を「視覚空間」あるいは「ユークリッド空間」と名付け、その特徴を「閉じられ、管理され、直線的で、静的な空間、回りの世界から抽象化された空間」であるとし、その中心至上主義的傾向を近代の特徴であると考えている [McLuhan, M. & Powers, B. R. 1989]。また、四人は音への関心を共有しているのだが（例えばマクルーハンとアドルノは音楽、イニスとマクルーハンとベンヤミンは対話に関心）、音楽や対話は、相互的、参加的、連続的であるという点で、開放的であり、リアリティを回復するものである。この相互作用という文脈で著者は弁証法と対話の概念を考察しようとする。四人は、西洋において弁証法的対話を死にいたらしめた「同一性の思想」を研究したという点で一致するのだが、その研究のためには、異なる視点を要求する否定的対話が重要になってくる。この意味で、イニスの周辺領域に関する歴史研究や、マクルーハンの「対抗環境 (counter-environment)」の概念、アドルノ・ベンヤミンの否定弁証法は、同様の問題関心に発していると著者は指摘する。

第二章「フランクフルト学派、アドルノ、ベンヤミン (The Frankfurt School, Adorno, and

Benjamin)」では、比較の前提としての彼らの理論が手短に紹介される。フランクフルト学派の批判理論とは時代の主流にある思想に対する抵抗を意図するものだったが、この意図は、イニスとマクルーハンが現代における知的独占と呼ぶ関心と類似している。また、四人は人間の時間感覚と対話の聴覚的相互的な原点を回復しようとする点で一致しているが、コミュニケーションに関心を寄せている点が、アドルノとベンヤミンがフランクフルト学派のほかのメンバーと異なり、この比較に適している理由である。また、彼らは、聞くことより見ることを優先するという視覚的バイアスが近代を特徴づけていると論じたが、これは、目が容易に操作可能であるのに対して、耳は外部に開かれ、かつ操作不可能なメディアであるというアナロジーによっている。さらに彼らは「概念的布置連関 (conceptual constellations)」に基づく方法を採用したが、イニス・マクルーハンも、社会科学の新しいアプローチとして、この布置連関とよく似た方法を採用していた。また、これはしばしば指摘されることだが、ベンヤミンとマクルーハンはともに、集合的幻影として物質世界を捉える一方で、文化の大衆化の側面に参加の可能性を見いだしていた点において、よく似た大衆文化観を持っていた。

ここまで確認された後、第三章「イニスの形成期と否定的政治経済(Innis's Formative Years and a Negative Political Economy)」では、まずイニスの思想的経歴が紹介される。オンタリオ地方の出身であるということと、第一次大戦への従軍経験によって、イニスは自らのマージナリティを実感する。このことからイニスは中央と周辺という分類に関心を持つようになり、「帝国」という概念を発達させたが、これは地理的な帝国のみならず、心理

的な含みを持つ概念であった。同一化の強制力によってマージナルな領域やバイアスは作り出されるが、このような周辺の中央に対する抵抗によって、歴史は作られてきたとイニスは考えていた。初期のイニスの研究対象はカナダにおける主要産物の政治経済的分析であったが、これが文化的バイアスを明らかにするという彼の試みの出発点となっていた。それゆえイニスは文明あるいは文化に関心を寄せるが、それは文化が狂信や同一化の母体であると同時に、柔軟性や解放性の母体でもあるからだった。メディアに関する後期の研究の中でイニスはこの洞察をさらに深め、「文化」と「メディア」は彼の研究の主題となった。イニスにとって、バイアスとはすべてのコミュニケーション・メディアに固有のものであり、つまりは、すべての文化に固有のものであった。

続く第四章「イニス：コミュニケーションと否定的対話(Innis: Communications and the Negative Dialogue)」では、イニスの問題関心が、政治経済学的研究から哲学的研究へと移行していった様子が示される。彼は1940年代後半になって学問的転換を図り、経済的に用いていた帝国概念を、政治経済と認識論を橋渡しするものと理解するようになった。彼の帝国概念に対しては多くの批判がなされたが、実際、彼自身が帝国という言葉で表すものをどのように評価しているのかは不明である、と著者は指摘する。しかしながら、イニスは帝国による知的独占と創造性を反比例の関係と捉えており、この関心に沿ってメディアの帝国が社会に及ぼす影響を示そうとしていたのであるから、肯定的評価であったはずはないだろう。また、彼は、書き言葉の支配が西洋社会のバランスを失わせたと考えが、その原因となったのは機械化された新聞の発

明であるとした。かつて、口誦的文化は、歴史の時間感覚、共感能力、意味の多義性に対する寛容を提供していた、と彼は考えており、このことを古代ギリシアのメディア史を詳述することによって論証した。また、彼の文章は、独自の口誦的記述方法以外にも、単線的因果説明の放棄、ユニークな引用方法や脚注によって特徴づけられるが、それは口誦性の概念をさらに発展させ、読者に読解の自由を与えることを意図している、と著者は評価している。

第五章では「初期マクルーハンとその哲学的枠組み(McLuhan's Early Years and Philosophical Framework)」が示される。マクルーハンはイニスの後期の著作に影響を受けているが、彼の原点はトマス・アクィナスの哲学とゲシュタルト心理学だった。アクィナスの「共通感覚」の概念にヒントを得て、マクルーハンは中世から現代への歴史の推移を人間の感覚比率の変化によって説明し、触覚という概念と結びつけたが、この触覚の概念は彼独自の否定弁証法的理論の基礎を形成したと著者は指摘する。マクルーハンが、感覚的バランスは生得のものではなくて、文化的歴史的経験を通じて形作られるものであると論じたからである。それぞれの時代や文化は支配的な感覚様式を代表しているということになるが、この思想は『機械の花嫁：産業人間のフォークロア』に表現されている。ここでは、フランクフルト学派の研究者の関心と同様、コミュニケーションと文化の「大衆」的側面は近代の中心的要素であり、メディアを通じて大衆の受動性が形成されるということが論じられている。とはいえ、ベンヤミンと同様、マクルーハンはメディアの創造的で解放的要素にも注目しており、その期待はマクルーハンの「地球村」という言葉によく表

れている。しかし、このような示唆的な内容にも関わらず『機械の花嫁』はあまり評価されなかったため、以後のマクルーハンの関心は、メディアのより深い分析へと向かうことになった。

第六章「視覚的社会から視点の喪失へ(From Visual Society to No Point of View)」では、新しい方針にそって客観性の否定的解釈を試みるようになったマクルーハンの思想的変遷がたどられる。その転換点となった著作『ゲーテンベルクの銀河系』(1962)は西洋の「視覚的」社会の発展をたどったものであるが、そこにはイニスの影響が見られる。マクルーハンの「視覚的」という言葉は、曖昧な表現として多くの批判を引き起こしたが、この言葉は近代の非歴史的世界観や支配の概念をも含むものである。視覚的技術は人間をモノと化してしまい、視覚的文化は受動的消費者を育て、個人の自由という観念を危機にさらす均質性を生み出すものである、とマクルーハンは論じた。この「視覚空間」は、一つの中心をもっていて、他のすべてはこの中心に従属するが、これに対抗するものとして、マクルーハンは「音響空間」という概念を用いる。音響空間には中心がなく、全体がいちどきに共振しあい、その中心は同時にどこにでもあるが、その周縁はどこにもないという性質を与えられている。この新しい概念を表現するため、彼は「ホット」と「クール」や「モザイク」や「反環境」といった用語を用いたが、これらの言葉は非常に多くの混乱を招くこととなった。しかしながら、彼が表現しようとしていた音響空間は、硬化した支配的システムの「単一の視点」に対抗する「視点の喪失」という現象を起こすものとして意図されており、ここには彼独自の否定弁証法的な関心が読みとれると筆者は指摘する。け

れども、『ゲーテンベルクの銀河系』以後の著作では、彼は歴史的記録に根拠をおくことをしなくなっていき、そのため音響空間は無意味な表現になってしまった、と著者は批判している。

そして最後に第七章「対話する理論家たち：平行した足跡？ (Theorists in Dialogue: Parallel Tracks?)」では、著者はこれまでの議論を踏まえて、フランクフルトとトロントの両学派の比較分析を行うが、何よりも、著者はイニス・マクルーハンを否定弁証法の理論家として位置づけることの必要性を提言する。我々の推論の根本は同一性と差異という二つの原則によって支配されているが、否定弁証法は非同一的なものの存在自体を通して、この原則に対する直接的な問題を提起するものである。四人の理論家たちは、このことをそれぞれ違うやり方で解明したのだが、イニスとマクルーハンは、コミュニケーション・メディアの研究によって経験的なアプローチを行った。両学派のアプローチは異なっていたが、意図するところは同じだったといえる。しかし、これらの主題の類似にも関わらず、この二つの学派には重要な相違があると著者は指摘する。トロントの二人はポスト・コロニアル的经验の中から発展し、異文化間に存在する包括的なバイアスを分析したが、これに対して、ヨーロッパの二人はドイツという文化的中心領域から思考を発展させて、心理的なバイアスを分析しており、ヨーロッパ中心主義の視点しか提供していない。結局彼らの文化的な環境の相違は、それぞれの理論的な帰結をもたらしたのであった。とはいえ、カナダの置かれた状況ゆえにイニス・マクルーハンが持ち得た、近代批評における包括的な視点はもっと評価されてもよいはずである。否定弁証法的に近代を理解しようとする彼らの

思想自体が、近代という時代を考える上で、従来の欧米中心主義的な思想状況に対する非同一的なものとして新たな思想形成に貢献できる、という著者の指摘は重要である。

3 おわりに

彼ら四人の否定弁証法は、相互理解のための終わりのない対話である。あらゆる合意・総合は、誰かをマージナルな領域へと追いやることになる。その解決のためには、マージナルな領域との差異を明らかにし、それを保持したままで、対話するしかないという訳である。しかし、この結論は、いくつかの問いを曖昧なまま置き去りにするものである。例えば、差異を認識したとして、その後どうするのか？ その対話が何らかの社会的変化を生み出しうるのか？ 現実的な政治について何をいったことになるのか？ さらに、総合的概念化なき対話と価値相対主義との境界は何なのか？

しかしながら、これらを差し引いても、近代批評の思想家としてマクルーハンを捉え直すそうとする本書は、大きな意義を持つものである。現在、公共的空間を論じる際に重視されるのは、ハーバーマスであるが、フランクフルト学派の第二世代と称される彼は、アドルノやベンヤミンのようなメディアへの具体的な関心を受け継いでいない。彼の議論においては、大衆的感性や、情報を受容する状況といった、リアルなメディアの側面への関心が抜け落ちている [Stevenson, N., 1995]。公共性を論じる際、ハーバーマスが重視しないメディアの感覚的、身体的要素を含む理論として、「触覚的」という用語が端的に表すように、マクルーハンの概念が有効になってくるのではあるまいか。このような理論的射程

を獲得しようところにマクルーハンの一つの可能性があるものであり、そのためには、本書が行ったような、メディア社会の予言者以上のマクルーハン像の提示が必要になってくるのである。

参考文献

- Adorno, T., (木田元 他訳、1996年、『否定弁証法』、作品社)
- Benjamin, W., (野村修編訳、1994年、『複製技術の時代における芸術作品』、『ボードレール』、岩波文庫)
- McLuhan, M., 1962, *The Gutenberg Galaxy: The Making of Typographic Man*, The University of Toronto Press (森常治訳、1986年、『グーテンベルクの銀河系——活字人間の形成』、みすず書房)
- , 1964, *Understanding Media: The Extensions of Man*, McGraw-Hill (栗原裕、河本仲聖 共訳、1987年、『メディア論——人間の拡張の諸相』、みすず書房)
- McLuhan, M. & Powers, B. R. 1989, *The Global Village: Transformations in World Life and Media in the 21st Century*, Oxford University Press (糟谷啓介訳、『天使からロボットへ——ユークリッド空間からアインシュタイン空間へ』、『現代思想』、1992年3月号)
- Miller, J., (猪俣浩訳、1973年、『マクルーハン』、新潮社)
- Stevenson, N., 1995, *Understanding Media Cultures: Social Theory and Mass Communication*, Sage Publications

(みやたけ みちこ・修士課程)